

*h. form. brevidens* Hara l. c. (1937). *Hypericum samaniense form. debile* Miyabe et Y. Kimura 植雑 51: 731 (1937). *H. yezoanum var. Nakaii* H. Koidz. ヒダカオトギリ 岩手植研 2: 99 (1937). *H. y. form. atropurpureipunctatum* H. Koidz. ショクテンヒダカオトギリ l. c. 100 (1937). *H. y. var. nanum* H. Koidz. コヒダカオトギリ l. c. (1937). *Veratrum japonicum form. intermedium* Nakai 植研 13: 701 (1937). *V. j. var. sessilifolium* Nakai ツガルシュロソウ l. c. 702 (1937). *Achillea pulchra var. angustifolia* Hara ホロマンノコギリソウ 植雑 52: 1 (1938). *A. p. var. rosea* Hara l. c. (1938). *Anaphalis alpicola form. robusta* Hara アポイハハコグサ l. c. 2 (1938). *A. margaritacea var. intercedens* Hara エゾカワラハハコ l. c. 3 (1938). *Cacalia hastata var. glabra form. intermedia* Hara ウスゲヨブスマソウ l. c. 66 (1938). *Miscanthus sinensis var. purpurascens form. paniculatus* Hara エゾムラサキススキ l. c. 284 (1938). *Setaria viridis var. pilosa* Hara エゾエノコログサ l. c. 287 (1938). *S. v. var. maritima* Hara エゾハマエノコロ l. c. (1938), 冬島と襟裳岬. *Spodiopogon sibiricus var. tomentosus form. violascens* Hara ムラサキオニアブラススキ l. c. 288 (1938). *Eleocharis yezoensis* Hara ヒメシカクイ l. c. 396 (1938). *Eriocaulon perplexum* Satake et Hara エゾイヌノヒゲ l. c. 400 (1938). *Allium Schoenoprasum var. yezomonticola* Hara ヒメエゾネギ l. c. 458 (1938). *A. S. var. y. form. leucantha* Hara シロバナヒメエゾネギ l. c. (1938). *Rubia pedicellata* Nakai エゾオオキスタソウ 植研 13: 116 (1938). *Scabiosa jezoensis* Nakai エゾマツムシソウ l. c. 19: 269 (1943). *Carex apoiensis* Akiyama アポイタヌキラン Caric. F. E. Asia 117 (1955).

植物 (省略).

(国立科学博物館)

□前川文夫：原色日本のラン—日本ラン科植物図譜 The wild orchids of Japan in colour. 30.5×21×5 cm., 革表紙, 総アート紙, pp. i~xiv, 1-495 (原色図版 187 枚, 凸版図多数) 誠文堂新光社 ¥ 27, 000. 日本のラン科の図譜は今まで当然あってしかるべき書であったのにも関わらず, 今日初めて前川教授の永年の研究の結果これを手にすることを得た。この待望の書は企画され手をつけられて以来やっと 16 年目に出版されたが, これも今日の目まぐるしい世には稀な例である。この間多忙な著者がこれのみにすべての時間を割き得なかったのは当然であるが, その時日は無駄には過されなかった。その経過の中に著者独特の進化論, 分布論が熟成し, これをこの書に取り入れることができたからである。ラン科植物のように微小な種子を有する群は種によっては意外に分布域が広く, 日本島弧の域内のみで真にこれを理解することはできない。著者がしばしば種・属のレベルで広くヒマラヤ地方, 中国大陸, 米大陸に言及

している所以である。各図版に対応する解説は平易な文で、性状、産地、発見・研究の歴史、時には語源に触れ、しばしば日本の古典への参照もあり、自から一編づつの随筆風をなし、読者をラン科の美と精妙さ、ラン科の多様性とその基礎にある原型との相関の興味の深い所に誘い寄せる。

描画はボタニカル・アートの第一人者太田洋愛氏の手になり、すべて生植物から（トラクチランは例外）活写された。氏は著者の指示に随い、忠実にほとんどすべてを実物大にまとめ、更に部分図を加えた。これによってたまたま生植物を入手し得た読者さえも見逃がし勝な自然が発掘されている。やや淡彩の日本画風の図面は世界の類似の図譜にない独得の日本のニュアンスを盛り上げることに成功した。材料蒐集にあたったのは主として山草界に重きをなす鈴木吉五郎氏で、氏の注意深い採集と培養がまたこの書の底辺を強く支えていることは云うまでもない。稀少な種においては、特にその苦心は並々ならぬものがあつたはずである。本書で発表された新属新種コハクランに *Kitigororchis* と献名したのも故あることである。

近来とみに栽培熱の盛隆を見る東洋ラン、エビネ類、ウチョウラン、ヒナラン、サギソウなどについては、変異品、交配品種に関して特に図版を加え、またシランの染色体半減株も収載されている。

この書はしかし単なる「図譜」ではない。ラン科の一般論のほかに、各属に関する著者独自の解説と新意見が多く発表され、このために著者の手になる凸版図をふくむ 65 pp. が別に割かれており、更にやや簡略化して巻末 30 pp. の英文に繰り返されている。図と共に英文はこの書の理解を国際的のものにしている。著者はこの後で前人の、または自己の旧説を訂正発展させた所も多いが、なお一部は決定的ではないとしている。著者の或は続く者の将来の研究が待たれる。原色図版に収載された種の数には 160、琉球列島のものも僅かに含まれている。書架に加えてずっしりとした重量感、単にその重さ 3 kg が示す以上のものがある。広くラン科の研究者、愛好者、栽培家、植物造化の美を愛する知識層の愛読を望む。 (津山 尚)

□ Charles R. Metcalfe: *Anatomy of the Monocotyledons. V. 5. Cyperaceae*, 597 pp. Oxford University Press, London, 1971. US \$ 29.00. 本書は広く知られかつ参照されている単子葉植物解剖学イネ科の姉妹篇として、同じ著者によって書かれた待望の大作である。著者の Metcalfe 博士は世界的に知られた解剖学者で、上記イネ科の以前にも双子葉植物解剖学 2 巻を Chalk 博士と共著で世に問われた。本書カヤツリグサ科篇は Metcalfe 博士退官前、氏が英国王立キュー植物園附設研究所の所長の時に完成されたものである。研究材料としてはキュー植物園の豊富な材料に加えて、世界各地より集まったものを用い、カヤツリグサ科分類学者の意見をも取り入れてまとめられたもので、カヤツリグサ科解剖分類学の決定版といって良い。更に本書の一大特長として、内容はいわゆる綜説的なものでは決してなく、原著論文として

充分評価されるべき未発表の見解が豊富に盛り込まれている事の特記すべきであろう。

総説では研究史や科の分類について簡単に述べてから、外部形態学的解説があり、今迄に余り知られていなかった特徴、例えば中空な茎とか、小梗の擬態としての葉等、について注意を喚起し、葉の形態学を詳しく述べている。葉の解説では新しい見解を十分に披れきし、*isobilateral leaves*, *pseudo-dorsiventral leaves* 等の興味ある意見が述べられている。

本論の解剖学は一般の見解から始まる。解剖学的特徴から、イネ科とカヤツリグサ科は別々に分化して来たものと考察し、カヤツリグサ科はイグサ科に近いという。カヤツリグサ科内の族間関係を論じ、スチガヤ族とヒトモトスキ族が近い事を述べられているのは非常に面白い見方である。イヌノハナヒゲ族は不均一な群と見られているが、この見解は筆者も同感である。

本書の主体をなす各論に、属毎の解剖学的記述がこまかく書かれ、各属について Metcalfe 博士の評が簡単に付け加えられている。日本で興味あるものを拾うと、解剖学的にはテンツキ属とイトテンツキ属及びヤリテンツキ属は甚だ近い。クロタマガヤツリ属は非常に特殊である。カヤツリグサ属に入れられたり、別属にされたり、意見の一致を見ないヒメクグ属、イヌクグ属、ミズガヤツリ属、カワラスガナ属等は解剖学的にはカヤツリグサ属と撰ぶ所がない。ヒンジガヤツリ属はカヤツリグサ属に似る、等々である。各論の終りに分類学的に重要な解剖学的特徴をまとめた章があり、大変参考になる。巻末に他の巻と同じく文献目録、事項及著者名索引がある。

本書を精読して感じる事は、解剖学的な特徴から推察されるカヤツリグサ科の属の間の関係及びそれから導かれる科の分類系が、外部形態を主体として考察した私の1961年のものに大変軌を一にしている事が感じられる。カヤツリグサ科研究に不可欠の快著である。

(小山鐵夫)

□羽島謙三・柴崎達雄篇：第四紀（地球科学講座 11）348頁，2,000円 昭和46年12月 東京，共立出版発行。第四紀は200万年前から現在に直接つづく地質時代で、人類の時代ともいわれるが、植物にとっても現存の種類の在り方や分布の上に深い関連のある年代である。分類に関心のあるものにとって、背景として知っておくべき時代でもある。この本は講座の一部ではあるが、それ自体独立していてもいいし、また第四紀学者としての編者お2人のまとめられたものだけに読みごたえのある内容となっている。全10章で第四紀学の性格、氷河と氷河時代、気候変化と海面変化、沖積平野、台地と丘陵、土壌、火山灰編年、構造運動、生物地理、人類の発展と石器時代をカバーするが、とくに周氷河地形とフロラ及び氷河時代の自然環境の変遷、第四紀の気候等は植物の古環境の把握に参考になるし、第9章の鈴木敬治・亀井節夫両氏の第四紀の生物地理は古生物学者の側から提示された生物地理として、現生の植物を扱うものにとって教えられるところがある。

(前川文夫)